

中山間部で働く トマト農家

出倉 裕一

聞き手・神野 和真 松永 海斗 (石川県立宝達高等学校1年)

自己紹介

私は出倉裕一です。石川県宝達志水町生まれで、都留文科大学を卒業して出版社に入社しました。その後地元つるぶんかに帰ってきてミニトマトやネギなどを栽培しています。子供の時は、キャンプ場で友達とサッカーしたり、小学校の時に父の田んぼで田植えや稲刈りの手伝いをしたりしていました。また、祖父と祖母が土地に木を植えて育てていたので、その枝打ちの手伝いもしていました。

きっかけ

就職するまでは農業をしたいと思っていませんでした。でも、農作業は前からなじみがありました。そして出版社にいたときに、いろんな農家と会っていました。農業は年寄りがやっているイメージがあったのですが、若い人が多く働いて

いたので、おもしろそうだと思って、それから自分も農業をやってみたくなりました。トマトやイチゴ農家が若いイメージが自分の中ではありませんでした。実家の農地でやればお金がかからないので、地元に戻って農家になろうと思いました。そして、やるならトマトを栽培しようと思いました。そこで、米をメインでやっている谷口農園でトマトの作り方を教わったのが始まりでした。

農業の仕事について

農業に携わる面積は、ハウス8棟で、その中でもトマトは18aです。中山間部で育てる利点は、下よりも涼しくて山水だから水をいくら使っても水道代がかからないことです。逆に欠点は、雪が降ると除雪ができないことです。夏にこの中山間部のハウスでミニトマトを育てていて、春や秋になるとチンゲン菜を育てています。そして冬は平地にある畑でネギを育てています。

夏は1日に大体12時間ぐらい働いています。特に収穫の時期は、5時に起きて暗いときは脇芽取りをやって、明るくなってから収穫をします。8時から10時くらいまでやって水やりして箱詰めしています。ミニトマトは温度によって色付きが決まり、暖かいほど早いです。でも、33度を超えると受粉しづらくなってしまいます。

育てているミニトマトの品種は、自分の入っている部会では、「キャロル10」という品種を作っていますが、自分では「花鳥風月」という品種を作っています。花鳥風月を作って2年目になりますが、これからはもう花鳥風月1つにしぼっていかと思っています。湿気が朝晩多いと、斑点病という病気にかかってしまうので、こまめな水分管理と肥料で対処しています。水やりは、1棟につき1日1回150リットル行っています。こだわっていることは、自分の作ったトマトを食べてくれる人で赤ちゃんの離乳食として使いたいという方もいるので、農薬をできるだけ使わずに低農薬で栽培するように心がけています。他県との育て方の違いは、長野県

で同じ時期にやっている人とはさほど変わらないけど、愛知県は秋から翌年まで収穫する作型で、鉄骨のハウスなど設備がすごいです。

販売について

出荷先は主に金沢や富山の市場で、余ったものはAコープなどに出荷しています。市場では、ミニトマトが1キロ600円、ネギが1キロ400円、チンゲン菜が1キロ300円で大体売られます。トマトのヘタが取れてしまうと商品価値が無くなってしまいます。そうなってしまったものは加工してドライトマトにしたり、羽咋の神子原^{みこはら}のカフェに出荷してパンの生地に練りこんで使ってもらっています。

他にやっている仕事

私が農業以外にやっている仕事は自分の地域の消防団と、



(上) ビニールハウスの中
(下左) 働いている様子
(下右) ミニトマト



羽咋郡市農業青年青雲会というグループに所属しています。青雲会は石川県で9地区あって、地域の農業をしている青年たちと集まって交流して情報交換などをして親睦を深めたりしています。

農家になってよかったこと

農業をやっている良かったと思うことは仕事の辛さは出版社にいた時も今も変わらんけど自分の時間を作れるし、精神的なストレスがないことです。逆に出版社から農家になって辛かったことは、思うように野菜の売り上げが伸びないことです。

今後

これから目指すことは、まず規模を増やすこと。そして40歳ぐらいには人を雇い、法人なら法人で経営できる農業を目指そうと思っています。そして最終的には、中山間部であと十数年したら何軒住んでいるとか、限界集落にならないかというようなネガティブなイメージを巻き返せるような仕事をしていくことを目指したいと思います。

最後に

農家の仕事をすれば、いろんな仲間と関わることができます。何年もすれば病気や品種や気温によって木がどう変化するかが分かってきます。一年一年研究していくつもりでやっていく仕事です。精神的なストレスはあまりないけど体力的なストレスはたまることがあります。なので、研究好きで体力に自信があり、我慢強ければ楽しくできると思うので、そのような人が農家に向いていると思います。

[取材日：平成28年8月2日・9月25日]

PROFILE

出倉 裕一 であら ゆういち

昭和56年8月3日・35歳
農家・ミニトマト栽培

平成19年に農山漁村文化協会に入社し、営業を通じてたくさんの農家の方と出会った後、平成21年に退社し、同年に就農した。ハウス施設で栽培しているミニトマトを主体に、露地では秋冬ネギを品目として規模を拡大しながら年間を通じた出荷体制に取り組んでいる。



● 取材を終えての感想 ●



聞き書きを経験して、初めは戸惑うことばかりで、しっかり最後までできるか不安でした。そして実際はとても大変でした。しかし聞き書き研修に参加したことによって、色々な人たちと会うことができましたし、出倉さんの話を聞いて、農業の仕事について深く学ぶことができました。僕たちが普段何気なく食べているものは、農家の人たちがたくさん手間暇かけて作っているということを知ることができました。今回の経験を生かして、今後私生活を送っていきたくらいなと思っています。今回貴重な経験をさせて頂いて、聞き書き研修で指導してくださった先生方や、お話を聞かせてくださった出倉さんに感謝しています。本当にありがとうございました。

(神野 和真 写真：左)

この取材を通して、最初はすごく不安でした。しかし、取材をしていくごとに不安は消えました。取材を終えて、野菜について少しは興味や関心を持ちました。野菜を作るのには、苦勞することが分かりました。しかし、改良などをして品質の良い野菜ができ、出荷され、人に届くとうれしいなと思いました。そして、自分たちの後にする人に、この取材をする楽しさ、編集をする楽しさ、完成に近づくまでのわくわく感を知ってほしいです。お話を聞かせてくださった出倉さんや、聞き書き研修でお世話になった先生方、今までありがとうございました。

(松永 海斗 写真：右)